

## ホロコーストと世界平和／北山夏帆さん

「いつだって戦争は憎しみしか生まない。だけどね、人と人とは国境を越えて友達になれることを忘れてはいけない。そして、例えば昨日の私のように、クッキングシートを切らして近所のロシア人の奥さんに借りにゆく。平和っていうのはこういうことだっていうのを忘れちゃいけないよ」

この言葉は私がのちにホロコーストを学ぶきっかけとなった言葉だ。

当時17歳だった私は、2009年8月から翌年の8月にかけて、一年間フィンランドに留学していた。どうしてフィンランドなのか？無論、先生や友人は私を疑問視した。高校生では語学留学が一般的な中で、私には一切そういう目的がなかったからである。私自身、何を学ぶことになるのか何の見当もついていなかったが、その一方で、誰も私を知らない場所ですべてをリセットして自分を見つめ直したい、

そして広い世界をみて、広い視野を手に入れたいという強い思いがあった。なにひとつ知らないフィンランドの異文化に飛び込むということは、私にとっていわば自分を試すための挑戦であったのだ。

今回私が主に述べたいのは、ユダヤ人大量虐殺と今の世界についてだ。正直に言って、直接ドイツと交戦していないフィンランドは、ホロコーストとは大して関係がない。しかし、この留学は私をそこへ導くためには必要不可欠なものであった。

当時通っていた高校の歴史の授業では、第二次世界大戦について学習していた。そこで私は大量に殺害されたユダヤ人を埋めるキャンプのビデオを観るようになる。一部のフィンランド兵もこのキャンプに参加していた。何千という死体は、決して日本の教育では観ることのできないものであった。私はその日食べ物も喉を通らないほどのショックを受けたが、同時に今まで知ることのできなかつた光景に強い関心を抱いていた。

冒頭の戦争と平和についての台詞は、お世話になったホストマザーの言葉だ。ちょうど第二次世界大戦が勃発した1939年、フィンランドは国土に侵入してきた旧ソ連との戦争を余儀なくされていたのだと、彼女は教えてくれた。一部の国土と多くの若い命を犠牲に独立を守ったのだという。

「未だにフィンランド人はロシア人を毛嫌いしている。日本と中国と同じ。きっとドイツに迫害を受けた国もそうね。いつだって戦争は憎しみしか生まない。けどね、国同士仲が悪くても、人と人とは国境を越えて友達になれることを忘れてはいけない。そして、例えば昨日の私のように、クッキングシートを切らして近所のロシア人の奥さんに借りにゆく。平和っていうのはこういうことだっていうのを忘れちゃいけないよ。」

平和とは、私にとって常にあいまいで形がないものだったと気づかされた瞬間だった。平和とは何か。戦争とは何か。私はすぐに歴史の先生にあのときのビデオを借りに行った。何度みても慣れぬ光景ではあったが、もっと知りたい、もっと知らなくてはならないという気持ちは膨らむばかりであった。

それから数カ月後の2010年6月、私は留学中に知り合った世界各国の友人たちとヨーロッパを9カ国まわる旅に出た。その中で、ドイツのナチスドイツ博物館と、ホロコースト記念碑、オランダのアンネ・フランク博物館も訪れた。ドイツの博物館では、加害者側の立場からあの大虐殺を考えることとなったが、そこにも多くの意味があった。償いたくても償いきれない過去の罪の重さを、ドイツがずっとりと抱えていることに気づいたからである。

アンネ・フランク博物館は、迫害を恐れ隠れ家生活を送っていた少女アンネの実際の家を改装した場所であった。実際にアンネが日記を書いていた部屋で、私はあのアンネもあのビデオでみた犠牲者の一人となったことを改めて思い出し、深い悲しみを覚えた。まるで友達を失ったかのような気持ちを抱いている自分に驚きも感じていた。また、もうひとつ今でも思い出す印象的な出来事がある。オランダ人の老婆が、私のすぐそばにいたドイツ人の友人を指して、孫に耳打ちしたのである。私はオランダ語はわからなかったが、すぐにどういふことを理解した。そのドイツ人の友人は、私の視線に気づき、悲しそうに笑った後、はっきりこういった。

「私たちは、直接戦争はしていない。65年前のドイツがしたことよ。だけど、それを関係ないと思ったことも、時間が解決してくれると思ったこともないわ。若者である私たち、そしてのちに生まれてくるドイツの子供たちも、ドイツ人皆が一生をかけて償っていかねければならない。そうすることで人と人は、いつか必ず分かり合えると信じたい。」

私は彼女の言葉をきいて、マザーの言葉を改めて考え直すこととなった。人と人は、国境を越えて友達になれる。これは、思ったより簡単ではないこと。絶対に許さないと、それでも分かり合いたいと強く願い、自国の罪と正面から向き合う若者がいること。そして私は同時に考えさせられた。私たち日本人は第二次世界

大戦の犠牲者だけだと思ひ込んでいないか？私を感じるべき日本の罪はないのだろうか？

私は帰国してすぐ、これらの経験を所属していた新聞局の顧問に相談してみたところ、すぐに何かやってみようと手を組んでくれた。先生は大学時代ドイツ史専攻でその分野に精通していたこともあり、ホロコーストについても博識な方である。そのうちの調べで、私は強制労働を強いられた収容所の中で最も大きかったポーランドのアウシュビッツが、現在費用不足で建物と遺品の維持が困難になってきていることを知った。そこで、募金活動を通して同じ高校の生徒や、近隣の方々を対象にホロコーストについてより知識を深めてもらう企画を立てたのである。

たった一つの靴、たった一枚の手紙を救うために。伝えたいという思いは勿論強かったが、はじめは正直、ありきたりな募金活動では、大した反応がもらえないのではないかという不安が大きかった。その募金活動も最終的にホロコーストについて深識になってもらうきっかけにすぎなかったので強い呼びかけはあえて控えた。生徒会も通じずに、私と先生と、協力してくれた後輩4人でどれだけできるかはまったくわからなかったのだ。

しかし、同時並行して流したホロコースト関連の映画上映会には、思ったよりも人が集まり、多くの生徒が涙し、言葉を寄せてくれた。「知れてよかった。」「僕も誰かに伝えたいと思った」。二週目はさらに人が来た。そのときちょうど平和学習に取り組んでいた一年生は、多くがこの活動をきっかけにホロコーストに関するレポートを書いてくれた。募金も予想を上回る5万円が集まり、私の卒業式には校長先生が式辞でこの活動について話してくださるまでに至ったのである。

同時に、日本が背負うべき問題についても調べてみるとやはり多くの問題が残っていた。南京大虐殺や、重慶爆発など、日本が中国・朝鮮に行った非人道的な行為は高校の教科書にとっても曖昧に小さく記述されていたことに気づいたのである。ドイツはフランスと共同で教科書を作り、歴史に偏見や改ざんをつくらないよう努力しているのに対し、日本の教育はどうだろう。もちろん明らかでない史実をあれこれ語るのには正しいとはいえない。しかし、それまで戦争が軍同士のみの戦いであったのに対し、日本が初めて罪のない一般市民や女子供にまで無差別に攻撃したこと。それが現在の戦争の形となったこと。他にも、慰安婦の問題や真珠湾攻撃など、真実は別として、学生が考えどう思つか話し合っべき問題はまだまだあるはずだ。

最後に、今年3月、日本では東北を中心に大規模な地震が起こり、津波の被害を受けた。多くの人間が命を落とし、海沿いの町はあたり一面瓦礫の山となった。私  
が日本に帰って8ヶ月が経過した、高校卒業直後の出来事だ。しかし、あれから  
まったく連絡を取っていなかった世界中の友人は、決して私のことを忘れてな  
なかった。留学中に知り合った二十数カ国、50人以上にわたる友達からたくさ  
んメッセージがよせられたのである。

「たった今ニュースで信じられない光景を目の当たりにしました。無事ですか」  
「食べるものはありますか」「毎日私の高校では日本のために全校生徒で祈りをさ  
げています。どうか一人でも多くの命が助かりますように」

私は涙した。世界にはまだまだ和解除するには難しい問題や確執が多く存在する。  
しかし、私たちが国境をこえて繋がっていることもまた事実である。離れてい  
ても、たとえもう二度と会えなかったとしても、私たちはずっと友達なのだ。世界の  
友人は私にそれを確信させてくれた。この留学、旅で経験したありとあらゆること  
は、日本を出る前の私が想像していた以上にたくさんを教えてくれたように  
思う。

現在、私は大学でドイツ語を専攻している。よりホロコーストについて詳しい文  
献を調べるためだけでなく、そして将来の夢である映画カメラマンになって、ドイ  
ツ人と一緒にドキュメンタリー映画を製作したい目標があるからだ。

旅は、発見と驚きの連続であると同時に、私にとって平和を考えるための、な  
よりの教科書だ。平和と幸福が一概に結びついていない先進国、貧しくても家族に  
囲まれ幸せだと明言する発展途上国の人々。これからの私は、アウシュビッツは勿  
論、世界中を旅して現地の人たちとそれぞれの幸せや苦しみをもにし、それらの  
感動を多くの人に伝えて生きたい。そして学びや発見を繰り返し、平和とは何か、  
少しでも多くの人々と一緒に考えていきたい。